

## 12月5日 待降節第2主日

イザ 11:1~10    ロマ 15:4~9    マタ 3:1~12

### 1. マタ

待降節第1主日の主題が福音の終末的使信の“今”という性格であったのに対して、第2主日にはその終末的未來の展望が主題として取り上げられます。代々の教会はこの日の朗読配分を通して、キリストが栄光に輝いて再び来られることについて聞いて来ました。旧き神の民への約束において「来るべき者」と呼ばれた方(11:3)は、「肉となって、(かつて)わたしたちの間に宿られた」(ヨハ1:14)方、そして「やがて来られる方」(黙1:8)と新約聖書が語っているのと同じ方です。

洗礼者ヨハネはイエスの宣教に先立って現れ、差し迫った神の怒りを語って人々に悔い改めを訴えました。そのヨハネの説教が、現代のキリスト者である私たちに証言しています。

v.7-8 「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。“我々の父はアブラハムだ” などと思ってもみるな。」

この世の歴史は無限に続くものではありません。キリストの福音はこの世で完結するものではなくて、神の国を目標としています(フィリ3:12-21 参照)。カトリック教会の洗礼の秘跡も、悔い改めと信仰が伴わなければその日には役に立たないであろうと、現代のキリスト者に向かってヨハネが警告しているように聞こえるではありませんか。

典礼暦は、キリストがへりくだって人間の姿で現れた第一の来臨から始まり、やがてその第二の来臨によって完成する、福音の終末的使信の二重性を明らかにする目的をもって、待降節から始まっているのです。

### 2. ロマ

イエス・キリストは本来ユダヤ人の救い主であり、「先祖たちに対する約束」(v.8)に従ってダビデの子孫から生まれました。この方が異邦人である私たちを受け入れて救ってくださったことへの感謝が、歴史の教会ではあまり大切にされて来なかったようです。このため教会の一致が、神の国を「一緒に受け継ぐ者」(エフェ3:6)としての兄弟愛によってではなくて、むしろ教派的な団結によって維持されて来ました。現代のエキュメニズムと呼ばれるものも、多くのカトリック信者の間では他のキリスト教諸派からの改宗者を受容することと理解されています。

v.4 「かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。」

異邦人キリスト者である私たちは、「以前には……キリストとかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく」(エフェ2:11-12)生きていたこと、しかし今やキリストの血によって神の国をユダヤ人と「一緒に受け継ぐ者」(エフェ3:6)とされたことを、聖書によって知るのです。共に神の国の国籍を

与えられて、「そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを待っている」(フィリ3:20)という感謝と希望による一致を、今年も教会は大切にしようと呼びかけられています。「わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。」(ロマ14:10)

### 3. イザ

エッセイの息子ダビデの子孫から、イザヤの預言が実現して御子イエス・キリストが生まれました(ロマ1:2-3)。私たちの福音はこの御子イエス・キリストに関するものです。キリスト教の誕生は神の救済史の中の出来事であり、教会はこの救済史の中を今も歩んでいます。そしてこの救済史は、神の国で完成するのです。そのような歴史的展望をもってキリストの福音を理解するために、典礼暦は各時代の教会に受け継がれて来たのでした。教会の中の大部分の者たちが福音の終末的な使信の意義を忘れてしまった時代にさえも……。

v.10 「その日が来れば、エッセイの根はすべての民の旗印として立てられ、  
国々はそれを求めて集う。そのとどまるところは栄光に輝く。」

私たちは今年も、主を待ち望んで歩みます。

ハレルヤ、アーメン。

## 12月12日 待降節第3主日

イザ 35:1～10 ヤコ 5:7～10 マタ 11:2～11

### 1. イザ

ネブカドネツアル王の征服によってバビロンに捕囚となったユダヤ人は、後に旧約聖書の中心部分となるヘブライ文書をこの地で集成しました。これらの神聖な文書群は、イスラエルの過去の歴史とユダヤ人に約束されたヤーウエによる将来の救済の実現をつなぐ精神的鎖となります。ユダヤ人はバビロンでの生活を単に仮のものと感じており、多くの者は預言者エゼキエルおよび第二イザヤによる故国帰還への期待に共感していました。新興キュロス王がリュディアとその同盟軍を BC.546 年に破るに及び、バビロンの滅亡は最早時間の問題となります。BC.539 年バビロンに入城したキュロス王に、ユダヤ人は故国帰還とエルサレム神殿再建を懇願し、翌 538 年に許可を得ました。この時期の第二イザヤの預言(40-55 章)の一部が、イザヤ書の 35 章に挿入されたものと思われます。それは 35:10 と 51:11 の類似を見れば明らかです。

第二イザヤは切迫するキュロス王の入城への期待を、ヤーウエによる将来の救済の実現のメッセージと象徴的に結びつけたのでした。そのようにしてシオンやエルサレムという名称が、ヤコブやイスラエルの名と共に、神の救済史に関わる用語として用いられるようになりました。35 章の預言全体がヤーウエによる将来の救済の実現の徴であり、さらに第三イザヤの初期の預言である 60-61 章へと受け継がれて行きます。

v.10 「主に贖われた人々は帰って来る。

とこしえの喜びを先頭に立てて、喜び歌いつつシオンに帰り着く。

喜びと楽しみが彼らを迎え、嘆きと悲しみは逃げ去る。」

### 2. マタ

洗礼者ヨハネは牢の中で思い悩んでいました。彼は神の御業が理解出来ないでとまどっていました。

v.3 「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」

彼にはその生涯の悲痛な結末が迫って来ていました。彼は自分の失望の大きな苦しみだけを見ていました。なんと彼の姿は、現代の教会の有様と似通っていることでしょうか。私たちにも神の御業が理解出来ない。現代のキリスト者は皆とまどっているのです。教会は世界に平和と救いをもたらす能力も可能性も最早持っていないという失望感が、人々の心を支配しています。

それに対するイエスの答えは、イザ 35:5-6 と 61:1 への言及でした。“あなたにはこの事実が見えないのか”とイエスは言われます。ヨハネの目には、自分をつないでいる鎖と自分を閉じこめている牢しか見えませんでした。しかしそこにイエスが来ておられるということ、神の終末的支配が実現しようとしていること、そして神の救済史の御業は決して阻まれることはないということは、さらに真実でありました。

現代のキリスト者も、神の終末的救済の実現を理解出来ず、神の国の福音を宣べ伝えることも自ら信じ

ることも出来ない無力感に支配されています。イザヤの語った終末的救済の実現の徴など、世界のどこにも全く見えないのです。しかし今年も待降節第三主日に、全世界の教会は聞いています。

v.6 「わたしにつまずかない人は幸いである。」

世の中の大多数の人々が、クリスマスの喧噪にひとときの息抜きや空騒ぎを求めて、サンタクロースを主人公にして浮かれているとき、再臨のキリストはもう「すぐ近くにおられます」(フィリ4:5)。神の終末的支配が実現しようとしていること、そして神の救済史の御業は決して阻まれることはないということは、さらに真実なのです。

私たちは現代キリスト教の世俗化と荒廃、その権威と社会的影響力の失墜、使徒継承的福音理解と信仰の喪失という事実を、正直に認めてもよいのです。それは紛れもない現実なのですから。しかし、その現実のただ中にありながら、私たちは一つのことだけは最早疑ってはなりません。再臨のキリストはもう「すぐ近くにおられます」(フィリ4:5)。神の終末的支配が実現しようとしていること、そして神の救済史の御業は決して阻まれることはないということは、それらの現実を超えてさらに真実なのです。

### 3. ヤコ

w.7-8 「兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。あなたがたも忍耐しなさい。心を固く保ちなさい。主が来られる時が迫っているからです。」

ハレルヤ、アーメン。

## 12月19日 待降節第4主日

イザ 7:10～14    ロマ 1:1～7    マタ 1:18～24

### 1. マタ

今年は主日のミサの朗読配分がA年でありますので、福音朗読には主にマタイ福音書が用いられます。この福音書におけるキリスト誕生の物語りは、中心人物がヨセフであって、「主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」という定型句を特徴としています(1:22, 2:5, 15, 17, 23)。これはルカ福音書の降誕物語りとは殆ど共通点を持っていないので、全く独立した文書として理解しなければなりません。

マタイはこの福音書を編集したとき、いわゆる処女降誕の伝承を知っていたものと思われる。それと平行して当時すでに、マリアは私生児を宿したという中傷がユダヤ人の間に広まっていた。マタイが彼の福音書で強調したのは、躊躇するヨセフがマリアの子をダビデの子孫として迎え入れる決断をしたことでした。ヨセフはダビデの家系であり、1:1-17にはダビデ家の系図が描かれています。(ルカ1:36によれば、レビ族のアロン家の人エリサベトの親族である)マリアをヨセフが妻として迎え入れることによって、その胎の子はダビデ家の子孫としてこの世に誕生することとなったのでした。「マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」(v.20)と主の天使が告げました。それは人間の偶然の気まぐれによってではなくて、神が決定的に介入された結果であり、ヨセフはそれを受け入れました。

v.23に引用されているイザ7:14は、当時のギリシア語訳聖書から取られたもので、“処女”という語が用いられていますが、元来のヘブライ語写本では単に“少女”であって、著者マタイには処女降誕の伝承をここで主題とする意図はなかったようです。神が躊躇するヨセフにマリアを妻として受け入れさせたという記述によって、著者マタイはユダヤ人の間に広まっているマリア中傷への反論を試みたものと思われる。それは神から出たことであって、人間の気まぐれや放縦によって起こったことではありませんかでした。

最大の強調点は、「インマヌエル」であり、「この名は、“神は我々と共におられる”という意味である」と解説されることによって、「この子は自分の民を罪から救うからである」というイエスの名の説明に光を当てています。代々の教会がその第二の来臨を今日に至るまで待望している天上のイエスは、このようにして2千年前にマリアを通して受肉されたこのイエスと同一の方なのです。

### 2. ロマ

w.2-3 「この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、御子に関するものです。」

キリスト教は決して新興宗教として出発したのではなくて、神の民イスラエルの真の中核として、しかし“後にいる者が先になり、先にいる者が後になる”という形で異邦人が主体となって歴史の歩みを続けて来ました。教会は自らが使徒継承によって受け継いで来た福音を、旧約聖書と切り離して考えることが出来ません。教会こそは旧約聖書の中で約束されたメシアとして御子イエスを信じる民であり、将来の神の国の

相続人なのです。

教会がクリスマスを祝い、また主の受難と復活を喜びと感謝をもって記念するのは、自らが神の救済史の中を歩んでいる民だからです。神の国がおとぎ話ではなくて現実の歴史の目標であるように、御子イエスがダビデ家の子孫としてマリアから生まれたことも、その受難と復活と同様に歴史上の事実であります。現代のキリスト者である私たちは、これまで“この御子に関する福音”を聞いて来たでしょうか。私たちが心の中に思い描いて来たキリストは“このキリスト”だったでしょうか。私たちが知っている現代の教会は、教会の内に向かって外に向かって、“肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた”キリストを宣教して来たでしょうか。答えは否！であります。既に久しくクリスマスは馬小屋でのおとぎ話とサンタクロースの祭りとなって、かつて受肉された「やがて来られる方」(黙 1:4)の祝いではありませんでした。

しかし、今年も待降節第4主日に天上のキリストは、その第二の来臨の日を前にして現代の教会に使徒の言葉を通して語りかけておられます。

vv.5-6「わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰の従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたもいるのです。…… 神に愛され、召されて聖なる者となった“現代のキリスト者一同へ。”」

私たちは将来の神の国の相続人として、かつてマリアを通して神が受肉させてお遣わしになったイエス・キリストの誕生の出来事を、共に祝おうではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

## 12月25日 主の降誕/日中のミサ

イザ 52:7~10 ヘブ 1:1~6 ヨハ 1:1~18

### 1. ヘブ

v.2 「神は、…… この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」

今は天の父の右の座にお着きになっておられる御子が、かつて私たちの間に宿られた出来事を、全世界の教会が祝っています。教会はその栄光を確かに見たことを、この祭りによって宣言しているのです。「それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」と、ヨハネ福音書は述べました。それはおとぎ話でも神話でもなくて、使徒たちの証言に基づいており、代々の教会はその使徒たちの証言をこの祭りを祝うことによって信仰的に再体験してきました。

降誕節は、人間のあらゆる不信仰にも拘わらず、神がその救済史の“終わりの時代”を開始されたことへの教会の信仰宣言であります。救済史の主体が神であって、人ではないことを、21世紀の教会は再認識すべきです。キリストの福音が、救済史を支えているのです。しかし教会が使徒継承によって受け継いで来たキリストの福音を、聖伝と聖書を通して学ぶことは、これから私たちが始めなければならない課題なのです。21世紀の教会は、目覚めなければなりません。

### 2. イザ

v.9 「歓声を上げ、共に喜び歌え、エルサレムの廃墟よ。」

神の子の誕生を祝うために、古くから西欧の教会は日付が替わる真夜中に賑やかに鐘を鳴らしました。この鐘の鳴る時刻を待つために、人々は前夜祭に教会に集まりました。それがクリスマスイブの起源です。鐘を鳴らすことはクリスマスの良い知らせの徴で、やがてクリスマスの祝祭音楽にも取り入れられます。教会にオルガンが普及するようになった17世紀には、多くのオルガンにふいごの風で鈴のように鳴る鐘が取り付けられました。教会はこのような工夫をこらすことによって、会衆が御子の誕生の出来事を信仰的に再体験するように仕向けたのです。

現代の教会も、この日に会衆が御子の受肉の栄光を再び見るために、普段は遠ざかっている信者たちにも呼びかけて、盛大にミサをささげます。廃墟のような現代の教会が、この日再びキリストの福音を聞くために集まるのです。既に久しく教会は廃墟となっていることを、私たちは薄々気づきながら、必死で否定して来ました。ミサが、そこで私たちが再びキリストの福音を聞いて教会が甦る集いであることを、理解しようとしませんでした。しかし、神はイザヤ書を通して語られます。

「主はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰め、荒れ野をエデンの園とし、荒れ地を主の園とされる。」  
(イザ 51:3) なぜ、なぜ現代の教会の実態は廃墟なのか。神はイザヤ書を通して、現代の教会に向かって言われます。「まこと(エメス = 神の真実)もなく、恵みの業をすること(ツエダカー = 神の義)もないのに、

主の名をもって誓い、イスラエルの神の名を唱える者よ。」(イザ 48:1)

しかしその神の民としての実態のない、救済史を支えるキリストの福音が何か別のものに置き替えられている廃墟のような教会に、それでも再臨のキリストが確かに来てくださる将来の神の国完成の喜びを先取りして、クリスマスを祝うことを神は私たちに求めておられます。

### 3. ヨハ

「民は受け入れなかった」にもかかわらず、「言は、自分の民のところへ来た」というこの逆説こそが、正にヨハネ福音書の証言であります(v.11)。復活の出来事も、さらにそのキリストの再臨も信じようとしな  
い、……それがキリストの福音と教会の救いの基礎であることを理解しようとしな  
ない現代のキリスト者に向かつて、今年も使徒の証言が語りかけます。

v.14 「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

主のご降誕、おめでとうございます。

ハレルヤ、アーメン。



## 12月26日 聖家族

シラ 3:2~6, 12~14    コロ 3:12~21    マタ 2:13~15, 19~23

### 1. マタ

マタイ福音書の1~2章に描かれているヨセフの姿は、主の天使が夢に現れて命じること、眠りから覚めると直ちにこれに従って行動した父親であります。私たちは、それ以外に何ひとつ聞かされていません。そしてそれは「主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」とだけ書かれています。

私たちが知っているマタイ福音書の舞台での彼の役は、それだけであって、ダビデ家の子孫であるヨセフは幼子イエスの父としての役を終えて舞台から消えて行きます。

そしてその記述で想起されている旧約聖書の物語りは、モーセによる出エジプトであります。イスラエルは飢饉を避けるためにエジプトに避難し(創47章)、やがて「そこで、強くて数の多い、大いなる国民になった」(申26:5)イスラエルを、神は御自分の民としてそこから呼び出されました(ホセ11:1)。イエス・キリストは御自身の血によって教会を新しいイスラエルとして呼び出すために誕生されたことを、マタイは証言したのでした(v.15)。v.20とv.21の“イスラエルの地”という新約聖書の中でここでだけ使われている用語は、モーセがその民を導き入れるために目指した“約束の地”のことであり、「この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった」(v.20)は、出4:19を想起させるための言葉であろうと思われます。ヘロデ王は紀元前4年に死に、その子アルケラオは紀元6年に罷免されました。イエスの出生の年は、これらより前と考えられています。

両親が少年時代のイエスにどのような教育を施し、どのような将来の可能性を用意したかが語られるのではなくて、ただ神の約束への信仰と救済史の実現への確信だけが描かれている……、それがマタイの書いた聖家族についての報告であります。

### 2. シラ

もしこれらの記述から、子供の親に対する服従と親孝行という道徳を読み取るだけであるなら、それは聖書を通して語られる神からのメッセージを聞いたことにはならないでしょう。自らの権威を自覚し、これを主張出来る親など滅多にいないし、ごく普通の子供たちはなぜ親に権威を主張する資格があるのか理解出来ません。道徳として押しつけられる親孝行などに関心はなく、これからの老人社会を支えて行くことは、若者たちにとっては避けることの出来ない、やむを得ず嫌々承認せざるを得ない厳しい現実と考えられています。

それでは聖書が語っている“父の戒め”、“母の判断”とは何でしょう。それは神の知恵を子供に伝えることだと聖書は言っています。教会が使徒継承を大切にするように、旧約のイスラエルは神の約束と希望を子孫に伝えて行くことを大切に考えました。シラ書ではこれを“知恵”と呼んでいます。

「すべての知恵は、主から来る。」「主を畏れることは、誉れと誇り、幸せと喜びの冠である。」「主を畏

れることは、知恵の初めである。」「主を畏れることは、知恵の冠、…… 知恵の根源、…… 教訓である。」

この知恵を受け継がせるために神は親に権威を与えたのであり、この知恵を学ぶために子は親を尊ぶことが必要だと、旧約聖書は教えました。知恵を持たず、神を畏れることを知らない親に、どうして権威が主張出来るでしょうか。どうして子に親孝行を要求出来るでしょうか。あなたが神の民イスラエルに属していないなら、聖書はあなたにとって意味を持たないのです。

### 3. コロ

v.12 「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、……」

「主があなたがたを赦してくださった」(v.13)「一つの体とされた」(v.15)ということが、キリスト教倫理の土台であります。それは、共にキリストの祭壇を囲んでミサをささげる民のための倫理であって、キリストの体を造り上げて行くものなのです。「外部の人々を裁くことは、わたし(使徒)の務めでしょうか。内部の人々をこそ、あなたがたは裁くべきではありませんか」と、使徒パウロは言いました(1コリ5:12)。

古来どこの国でも、新興中流家庭(成り上がり者)の子弟教育は、自分の子供たちに親よりもっと勝った社会的経済的成功を期待するものでした。“鳶(とんび)が鷹(たか)を生むことはない” のですから、子供たちは当然自分の能力以上のポーズを取る術を学ばざるを得ず、策略と贈収賄から果ては学歴詐称まで、あらゆる悪知恵がはびこります。そこでは親の権威や子の従順も、一族が所有する不当な権力や財産を守るための重要な手段となります。

自分の信仰と、与えられた救いを子孫に受け継がせるための、キリスト者の家族のための倫理を、そしてそれだけを、私たちは聖家族の祝日に心に留めましょう。同じキリストへの信仰を共有していない現代の多くの家族にとって、それは手の届かないことのように見えるかもしれません。しかし、幼子イエスを与えられたヨセフとマリアの家にとっても、それはまだ未知数のことでありました。ただ神の約束への信仰と救済史の実現への期待に生きているヨセフとマリアがいた……、そのことを、そのことだけを今朝の福音書は語っています。

21世紀のキリスト者である私たち一人一人は、今次の問の前に立たされています。あなたは、次の時代の若者たちに伝える“キリストの福音”を確かに持っていますか？ あなたの信じている福音は、教会に使徒たちから伝えられ、代々の教会が受け入れて来たものと同じものですか？ 私たちの信仰と希望とは神にかかっているのです。           アーメン、ハレルヤ。